

韓国語学習の高大接続を考える —関東国際高等学校韓国語コースの13年を振り返りつつ—

黒澤 真爾

1. はじめに

私が勤務する東京の関東国際高等学校(私立)は、外国語科の中に英語・中国語・ロシア語・韓国語・タイ語・インドネシア語・ベトナム語の各コースを設置している。韓国語コースは2000年に開設され、初年度の入学者は7名であった。その後少しずつ増え、本年(2013)は38名の生徒が入学した。増加の理由としては、教育業界における認知度の高まりもあるが、2005年以降に急速に日本の若者の間に浸透したK-POP人気によるところが大きいと言えよう。

本稿では、全国的にも初めての試みといえる高校での韓国語コース開設以降の13年間を振り返りながら、その成果と今後への課題について考えてみる。

2. 開設期(2000年4月～2003年3月)

開設期は、まったく手探りの3年間であったと言える。開設前年(1999年)の春、私が勤務する民間の財団(財団法人アジア学生文化協会)に関東国際高校から、「高校で初の韓国コースを開設するので協力して欲しい」との依頼があった。韓国への留学経験があり(1986～89)、当時高校での韓国語の選択授業を担当していた(埼玉・私立自由の森学園)私に白羽の矢が立った。高校サイドの責任者が持ってきた資料は、単位数が書かれた大まかなカリキュラム(教育課程)表のみであった。それ以外は全てこちらにまかせるということであった。メインとなる韓国語の授業は、年6単位(6時間/週)×3年で、3年次に選択で+3単位が可能。3年間の学習目標も、教材も、提携校も、海外研修先(本校の外国語科は2年次に専攻言語の現地に短期留学するという慣例がある)も、パートナーのネイティブ教員も、進学先も、何もかも決まっていなかった。高校初なのだから、まあ当然と言えば当然ではあるが、どこから手をつけて良いものやら。「困った」というのが正直な気持ちだった。そこで、全てを一度に決めるのではなく、決められることから一つずつ決めていくことにした。

モデルケースを国内に求めることができない私は、韓国語教育の本場である韓国へと向かった。主要大学の付属語学教育機関(いわゆる語学堂)を訪問し、カリキュラム内容、教材、短期留学の受け入れ可否等について尋ねてまわった。可能であれば提携を結びたいと思っていた。ソウル大学、延世大学、高麗大学、梨花女子大学といった韓国語教育で既の実績のある大学を順次訪ねたが、話しは聞いてくれるものの、よい返事は聞けなかった。大学間の提携には関心を示すが、日本の一高校との提携は、正直興味が無いようであった。経費の問題以上に高校生は「手がかかるわりにメリットが少ない」というのが本音のようであった。半ば諦めかけていた私は、訪韓日程の最後にソウル東大門区にいつする慶熙(以下キョンヒ)大学を訪ねた。韓国語教育の分野で後発であったこの大学には、あまり期待をしなかった。しかし意外にも同大学国際教育院の韓国語教育部長(当時、現院長)金重燮教授は、熱心に私の話しを聞いてくれた。そして、2000年度から同教育院で使い始める新たな韓国語教材を見せてくれた。教材を見た瞬間、私は「これだ!」と思った。実は、日本を経つ前に、韓国内で使用されている教材を複数入手し、高校での使用が可能であるかどうか検討をしていたのである。国内で市販されている教材は、どれも成人向けの初級教科書で、高校の専門課程で使えるような内容ではなかった。では、韓国の教材はどうか?主要大学の教材は、いずれも使用語彙や文例が多すぎ、高校生、特に初習者にとっては「難しすぎる」内容であった。「主教材無しで始めるしかないのか?」と、思っていたところで出会ったキョンヒ大教材であった。このキョンヒ大教材は、従来のテキストと以下の点で大きく異なっていた。

- ① 4技能すべてを網羅した「統合型」テキストである。
→ 従来のテキストは4技能を分離させた、技能別テキストであった。
- ② テキスト中の主人公が学習者と一緒に学んでいくスタイルである。
→ 従来のテキストは主人公(話者)の位置づけが不明確であった。
- ③ 語彙数が少なく、重要語彙が明確である。
→ 従来のテキストは使用語彙数が多く、初級者に不必要な語彙も多い。
- ④ 活動(タスク)を中心とした構成になっている。
→ 従来のテキストは活動よりも「文例」を多用した構成になっている。
- ⑤ 視覚的に優れ、学習者の興味を誘発する。
→ 従来のテキストは文字中心で、視覚媒体はそれほど重要視されていない。

このテキストが何より優れているのは、学習者自身が「このレベルまで進めば、このようなことができるようになる」という、いわゆる Can-do イメージが自然に浮かんでくるという点であった。テキストの中に感情を移入し、徐々に韓国語が使えるようになっていく疑似体験が可能なのである。「これならば高校生でも使える！」そう思った私は、金院長に短期留学の受け入れが可能かどうかたずねてみた。金院長は躊躇せず、「是非、一緒にやりましょう」と答えてくださった。この日を境に、韓国語コース開設に向けて山積であった課題が一気に解決していった。

上記のような準備過程を経て、2000年4月、韓国語コースは無事開設した。入学生徒7名。韓国語担当教員2名。私の他に日本育ちの在日韓国人の若い教員が週の半分の授業を担当した。使用教材(キョンヒ大教材)、おおまかな学習目標(卒業時に韓国語能力検定3級取得程度)、短期留学先(キョンヒ大)が決まり、日々の授業が始まった。

「学習の手引き」なるものが存在しない高校韓国語教育で、我々担当教員の唯一の支えになるのが、日々の授業報告書である。毎日の授業目標と、授業内容、実施結果を簡潔に記したこの報告書は、13年経った現在も続けられている。授業がうまく運営できていないと感じたとき、また生徒への定着度が低いと思われるとき、我々教員は必ずこの報告書に立ち返る。毎授業の授業目標が Can-do 方式で書かれているのも、本報告書の特徴である。授業は教員主体ではなく、生徒が主体であることを決して忘れてはならないという、我々の意思の表れであった。生徒をとりまく教育環境は、必ずしも恵まれたものではなかったが、それでも2年次の短期留学(50日間;ソウル/安東)も無事実施し、2003年3月、設立に立ち会い共に学んだ第一期生6名(1名が途中退学)は卒業していった。各々の進路は国内大学4名、専門学校1名、就職1名であった。

3. 発展期(2003年4月～2009年3月)

第一期生が卒業し、カリキュラムがある程度固定した後も、コース運営はなかなか安定しなかった。主な理由は生徒募集の難しさにあった。ある年は20名を超える入学者を確保したかと思えば、翌年は10名を割り込んだりもした。この時期、開設期に作った教育システムを基本的に継続・運営していくことになるが、開設期から以下の2つが大きく進展した。

1) 教員の質向上

2002年4月にキョンヒ大学から人事交流で韓国語教育の専門教員が本校に赴任した。後に韓国語コースの専任教員となる金ドンウン氏である。彼の赴任により、韓国語の教育内容は飛躍的に向上する。彼は、キョンヒ大学で長く韓国語教育を担当してきた韓国語教育の専門家であり、本校が採択した教材の執筆者の一人でもあった。安心して授業を任せることができ、なおかつ教科書の特性を生かした授業展開が可能になった。

2) 高大の接続

この時期、複数の大学と韓国語に関する教育連携協定が結ばれることとなる。まず、国内では法政大学国際文化学部と高大連携の協定を結ぶことができた。これは本校の2～3年生を対象にしたプログラムで、年間10名まで(各学期5名×2)の生徒が希望する国際文化学部の講義を受けることが可能であり、さらに学部入学した際には、受講した講義の単位が認定されるというものである。韓国のキョンヒ大学とも短期留学以外に進路先として正式に協定を結ぶことができた。コースの卒業生で、規程を満たした生徒上限2名までが奨学生(学部生)として入学できるという内容である。

4. 安定期(2009年4月～現在)

この時期は、入学生の数も安定し、運営が比較的安定してきた時期である。K-POP 人気も手伝い、20～30人台の入学者を確保することができている。ただ、入学者の数が以前に比べ増えたことで生徒の様相も多様になってきた。

最も顕著なのが入学時の「既習者」の割合であろう。ここで言う「既習者」とは、教育機関で一定期間学習したという意味での既習者ではなく、独習等を含め触れる機会があったという広義の「既習者」である。開設年の入学者(7名)の中で、既習者は0名であった。これに対し2013年入学者(37名)中、初習者は10名ほどで、それ以外の生徒たちは何らかの形で入学以前に韓国語に触れたことがある生徒たちであった。「既習者」を詳しく分けてみると、以下の3つに分類できる。

1) 家庭内使用者

いわゆる「在日」や韓国につながる親族がいる家庭に育った生徒。中には数年韓

国での滞在経験を持つ生徒もいる。言語能力としては、ある程度会話が聞き取れるレベルの生徒から、ほぼネイティブに近い4技能能力を有する生徒まで、さまざまな状態。

2) K-POP マニア

ここ3～4年で急増した。リーディングとライティングは殆どできないが、「聞く」能力と発話能力、特に「発音感覚」に優れている生徒たち。モチベーションが高く活発で、授業への参加も積極的である。ただ、初級～中級への移行期に、構文等が複雑化してくると、極端にモチベーションが下がる生徒が複数見受けられる。

3) 独習者／純粋既習者

上記1)2)を兼ねる生徒もいる。市販のテキスト等を使っての独習者、もしくは市民講座等で一般の学習者に混じって学習した生徒。既に基礎学習を終えている生徒(ハングル検定4級程度)もあり、モチベーションは非常に高い。またこれらの生徒たちは比較的学習能力が高い生徒が多いのも特徴である。また、ここ2年続けて中学時代に自主的に韓国への留学を経験した生徒が入学している。

5. 生徒の到達度の変化について

韓国語の到達度を測る技能検査として「韓国語能力検定(TOPIK)」がある。本校ではコース生に対し、開設時より TOPIK の受験を奨励している。目標到達度としても TOPIK は比較的にわかりやすく、1学年→1級、2学年→2級、3学年→3級が受験の目安になっている。TOPIK における学習到達度を、開設時と現在とで比較してみると、以下ようになる。

- ・2003年3月卒業生(第1期生) → 卒業時3級到達者 = 0%
- ・2013年3月卒業生(第10期生) → 卒業時3級到達者 = 80%

上記の数字からもわかるように、この10年間で大幅に学習到達度がアップした。ある意味で、同じカリキュラム、同じ教材、同じ教員でコースが運営されたのに、なぜ到達度がアップしたのだろうか？理由をいくつか考えてみた。

理由1) 生徒の初期モチベーションの向上

まず、第一に考えられるのは、生徒自身の授業に対する初期モチベーションが格段にアップしたということであろう。後述するが、テストの成績や進路に付随する学習動機は、後発的な要素である。学習する中で生じてくるモチベーションであるが、これに対して初期モチベーションは、学習をスタートさせるときに必要な動機である。以前に比べ、この初期モチベーションが格段に増しているように思われる。特に前述した K-POP 大好き生徒たちは、授業に対して総じて積極的である。結果として、教員が以前と同じ語彙数、同じシラバスで授業を進めても「定着度」が全く異なってくる。スタート時点でのモチベーションは、継続学習の重要な要素である。

理由2) 学習環境の変化

さて、どんなに初期モチベーションが高い状態で学習を始めた生徒であっても、その後の後発的な動機がともなってこそ、大きな成果が得られる。逆に言うと、どんなに初期モチベーションが高くても、その後の後発的な動機が付与されなければ、大きな成果を期待することはできない。後発的な動機として最も得やすいのは、「実際に言語を使用する楽しさ」やそれに付随する「達成感」である。つまり、学習した言語を実際に使用することで、後発的な動機が誘発されるのである。そういう意味で、現在は以前に比べ後発的な動機が得やすい状況であると言えよう。日本と韓国の高校生が、交流会などを通じて出会う機会が増え、高校生同士が直接コミュニケーションをとることができるようになった。また、SNS の発達も韓国語使用機会の増加に大きな影響を及ぼしている。出会いの機会、コミュニケーションのチャンスは交流会だけでなく、ネット上にも存在しているのだ。実際に日韓の高校生がネット上でおこなっているコミュニケーションを見ると、互いの文字(日本語・ハングル)を使って、我々の想像以上に複雑なコミュニケーションをおこなっていることがわかる。

理由3) 高大接続の強化

開設当時、韓国語による「高大の接続」が無かったため、進路決定に向けてモチベーション維持が難しかった。その間、国内外の複数の大学と提携を結ぶことで、確実に「進学」を媒介にした学習動機が高まったと思われる。特に、海外の大学との提携(韓国・キョンヒ大学等)は、留学可能な水準(TOPIK4級以上)を明確すること

で、確実に生徒の学習に対するモチベーションをアップさせたといえよう。

6. 今後の課題

学習指導要領に記載がない英語以外の外国語の場合、本来の教育内容以外の様々な要因で受講生数の増減があり、それは本校のように専門のコースにおいても例外ではない。韓国との外交的な環境が悪化している現況では、今後においてもK-POP ブーム時のように多くの生徒が確保できるという保障はない。当面、韓国語等英語以外の外国語が学習指導要領等に記載される予定はないため、コース開設時以来進めてきた学習環境の整備を継続していく必要がある。さらにグローバル人材の育成という社会的な要請に照らし合わせた時、以下のようなあらたな課題も見えてくる。

① 英語も含めた総合コミュニケーション力としての複言語能力向上

今後、本校が目指す韓国語コース生の理想像として「日・英・韓3言語を使い、活発にコミュニケーションをはかる人物」を掲げる必要がある。従来、本コースでは、英語教育に対し韓国語教育が優先される傾向にあったが、今後は、母語である日本語を核にし、2外国語(英語、韓国語)を適宜使いながら能動的にコミュニケーションをとることができる人物の育成をイメージしていくこととなる。これは、日本という社会が要請する「グローバルに活躍する人材」の像とも一致する。

② 高大接続事業の強化

現状の高大連携に加え、さらに大学の教育関係者とのコミュニケーションを密にはかり、本コースのカリキュラムと接続が可能な大学／学部を増やしていく必要がある。また、大学側が求めるグローバル人材育成の基礎課程としての高校教育を調査し、よりスムーズな接続ができるよう、語学のみならず他教科の内容も適宜改善していくことが望まれる。

③ 第2外国語教育課程制定に向けての動き

コースの学びをどんなに充実させても、韓国語が教育課程として認定されなければ、運営が不安定な状況から抜け出すのは難しい。そこで、他の言語教育の関係者とも連携をはかり、高等学校における第2外国語教育課程導入に向け、様々なアプロ

一チをしていかなければならない。その意味で、JACTFL が担う役割は非常に大きいと言えよう。

7. 結語

2000年4月に開設した本校韓国語コースの今までの変遷と現況、さらに今後の課題を概括してみた。世界規模で見た場合、韓国語(朝鮮語)は決して大きな言語とは言えない。英語や中国語、それに今後台頭が予想される東南アジアや中東の諸言語に比べると、使用者の人口は多くない。しかし、何といても日本人にとって最も近い国の言語、すなわち「近隣語」であり続けることに変わりはない。朝鮮半島をとりまく政治環境は未だ不安定であり、ある意味予断を許さない状況である。また、ここ10数年来良好に見えた韓国との関係も、歴史認識や領土問題が外交問題にまで発展し、市民交流にも影響を及ぼしかねないところまで来ている。このような難しい時期だからこそ、日本の若者がしっかりと「近隣語」を学び、政治に左右されない土俵で自由に議論できるような環境を、我々教育関係者は作っていく必要があるのではないだろうか。

(関東国際高等学校)

Bridging the Gap Between High Schools and Universities through Korean Language Education—Insights from 13 Years of Experiences at Kanto International Senior High School—

Shinji KUROSAWA

Thirteen years have passed since the establishment of the Korean Language Course at Kanto International Senior High School. This paper reflects on past experiences and discusses future challenges.